

令和元(2019)11月12(水)~11月16(土)

ふじは
無様

5.487P

「小野小町」田
かたは 265P

黒岩涙香 24P

5619P上58P

大正二年七月二十日再版発行、二四頁参照)

まさしく、
負け犬の遠吠

といつたところである。

己の無様な腹立たしく思うと同時に

未練がましく、何かとこと言わずにおれ

なかつたに違いない。

自尊心(貴公子としての誇り)を傷つけろ

水た男等にとつて、よほど口惜しかった

のたろう。

と、いう。(「小野小町論」黒岩涙香、朝報社)

生殖機能の事であらうが、男に水なかつた

ため、色々悪口を云わせたと見える。云

く

かつたなど書いてある。ホトとは、多分

「或る著書などには、小町に「ホトか無

者達が一跡を絶たなかつたらしい。

↑↑↑悔し紛れに、小野小町を悪し様という

(*)

また、いつのことだったのか定かでないが、こんな話が
伝えられている。(古今集「卷十二、恋歌一、五五六〜七」)

下つ出雲寺(加茂川に近い上つ出雲寺の南にあった寺)で
故人の法事が営まれた日に、導師(法事の首座となる僧)
であった真静法師が話してくれた経文の語句の一節をとっ
て、安倍清行朝臣(八二五〜九〇〇)は恋歌を詠み、小
町のもとに贈った。

包めども袖にたまらぬ白玉は

人を見ぬめの涙なりけり

返し

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす

我はせきあへずたぎつ瀬なれば

「いくら包み隠そうとしても私の白玉は袖からこぼれてし
まいます。考えてみたら、これはお経にいう玉と違い、人
に逢えないときに目から流れ出る涙だったのです」

清行は、「人を見ぬめ」を表面は故人に逢えない意味に
とれるようにし、裏面で小町に逢えない意をきかせて贈っ
たのだった。

小町の返事や如何に、……と待つほどに、やがて、

「あなたのはとおりの涙だから袖で玉となってい
るのです。私の涙はこのとおり逆巻いて溜つ瀬(急流)の
ように流れているので、せき止められるものではありません
ん。しかしそれにしても、厳肅な追善供養の席でこんな不
謹慎な歌を詠むとは、何とおろかなことでしょう」

という辛辣な返歌が届いた。

愛する小野貞樹が悲運の死を遂げ、さらにまたかけがえ
もなくいとしい四のみこまでがこの世を去ってしまった、
……小町の沈んだ心は、幾年もの長い間、立ち直れなかつ
たに違いない。

特にこのような法事の席では、——心優しかった今は亡
き人の面影など思い起こされて、溢れる涙はせきあへず
(押さえようとしてもこらえきれず)、とうとうと流れ落ちて
いったのであろう。

そんな悲しい思いでいるときに、清行から恋歌が届いた
のだった。

たしかに清行の歌は、一見、故人を偲んでいるようにも
みえはする。
しかし、その歌を受け取った小町は、歌の裏に、恋心が
隠されていることを見抜いたのである。(「恋歌」として収め
られている歌である)

5,488P

ここに小町は、**潜行**を幾分かたりともたしなめ、叱責する意図をもって、「おろかなる」という返歌をしたためたように推察される。

●尚、心の内の恋人であった四のみこが亡くなった直後の頃であれば、「悲嘆のあまり」このような歌を作って返答することとはなかったと思われる。

四のみこがお亡くなりになって一・二年の後、もしくはそれ以後の作であろうと想像される。

●あるいはもしかしたら、四のみこの為の法事だったのかも知れない。

「小町の孫」と「宮内省管轄下の小町塚」について

これから以降、とても信じ難い話の数を書き綴ってゆくことにしたが、……その前に、予め述べておきたい一点がある。

①『後撰和歌集』は、「小野小町の孫」の歌を載せている。

②京都府綴喜郡井手町（奈良線玉水下車、徒歩三分）にある

「小町塚」は、宮内省の管轄下に置かれている。（小町伝

説「**明川忠夫**、現代創造社、五六、九九頁参照）

という一つのことである。

5,489P

①橋本直香の『歌仙部類抄』女房部には、「孫あれば子あり、子あれば夫ありて、云々」と記されている。

小野小町は、いったい誰との間に子をもうけたのだろうか。

②また、「小町塚」が宮内省の管轄下に置かれているということは、ただごととならない重要な事情を示唆しているようにうである。

「小野小町は、たぐい稀な絶世の美女で、しかもひときわ擁でた歌才があつて、四のみこを慕う歌を始めとする数多くの香り高い名歌を詠んだ」とはいえ、いわばただそれだけの理由により、……小町の墓「小町塚」が宮内省の管轄下におかれた、などとは首肯しにくい。

以下、こうしたことを念頭において、この物語を書き進めてゆきたい。

『雨乞の和歌』について

まずここに、少々早すぎるけれども、『雨乞の和歌』について簡単に述べておこう。

神代紀上第六段一書第三には、

141

「日神、素戔嗚尊と、天安河を隔てて、相對ひて乃ち立ち
て誓約ひて曰はく、云々」

とある。

●この物語では、

〈その昔、肥後国合志の広大な台地に築かれた壮麗極まり
ない都城の西北隅の『横山』の東南麓に、川幅の狭い『天
安河』(川を隔てた対岸で喋る言葉が明瞭に聞えるほどの小川。
いま「~~小野川~~」という)の流れがあったのだろう〉

と述べた。(第三十六章〈天安河をはさんでの戦い〉の項にお

いて既述)

●そして、

〈小町は、仁明天皇の承和八年(八四一)の春に、古京の西
北の隅(今の横山南麓「小野の里」)で生まれたのだろう〉

と纏述べてきた。

*

さて、それがいつだったのか極よく分からないが、…
とある年の夏、勅命が降って、小野小町が『雨乞の和歌』
を詠むことになった。

『雨乞』という儀式は、往古においては、極めて重大な国
儀とされていた。

その大切な国務が、小町に命ぜられたのだった。

5,490¹

勿論、雨乞の爲に、立派な祭壇が設けられたに違いない。
その祭壇の前で、小町は、優雅ながらも神妙に、時に激
しく神に祈り、――そして巖かに、『雨乞の和歌』を詠ん
だことであつたらうか。

群書類従本『小町集』に、こう記されている。

日の照り待けるに雨乞の和歌よむべき宣旨ありて
千早振る神も見まさば立騒ぎ
天の戸川の樋口あげ給へ

なんとも莊重な歌である。即ち小町は、

〔千早振る神よ。じつとしていないで、立ち騒いで神鳴り
(雷)を起こし、『天の安川』の樋(水門)の口を開いて、
直ちに雨を降らせ給へ〕

と歌ったのだった。

なお、勅命によって小町が『雨乞の和歌』を歌いあげた
というのだから、…必ずや小町の声は、澄みきっていて

よく通り、しかも聞く者がうっとりするほどのこころよい
調子を持つていたのだから、と想像される。

また、小町は、

ことわりや日の本ならば照りもせめ
さりては又あめが下とは

という雨乞の歌もつくつたと俗説に伝えられている。(小

野小町論「黒岩涙香、朝報社、一六〇八頁、二二二頁参照

だが何故、小野小町が雨乞の歌を詠んで、「雨を降らせ給へ」と神に祈願することになったのだろうか。

それは全くの想像でしかないが、~~前回述~~述のように、

——小町は、神官の家に生まれ育ち、幼少の頃からすでに

神に祈ることが身についていたからかも知れない。(第九

十五章「小町の誕生」の項において既述)

恐らく時の朝廷は、

「小町が、歌を実にたくみに詠むばかりでなく、神に仕え

る作法をも身につけている

と聞き知り、~~どうしてを知らず~~……《名指》して、小町に『雨乞の

和歌』を詠むように命じたものと推察される。

*

それでは、小野小町に、

「雨乞の和歌よむべし」

という宣旨が降ったのは、一体、どの天皇の御世のことであ

ったろうか。

いうまでもなく推論の域を出ないが、以下のように想到

される。

■小町が、承和八年(八四一)に生まれたとすると、仁明

朝や文徳朝のことではあるまいと思われる。

5.491P

文徳朝末年の天安二年(八五八)に小町は十八歳だった

こととなり、——国家の重大事「雨乞の儀式」において神

に祈りを捧げ、『雨乞の和歌』を詠むには、まだ幾分若す

ぎる感がある。

■『宣旨』とは、~~天皇の命を伝える公文書の形式~~である。

(「広辞苑」《宣旨》参照)

そこで、ここに、

《天皇御自身が、小町に『雨乞の和歌』を歌わせたいと望

まれたのであろう》

と解してみたい。

とすれば、

①清和天皇(文徳天皇の第四皇子。八五八年に九歳で即位。

在位八五八〜八七六年。陽成天皇に讓位。八八〇年に三十一歳

で薨去)

②陽成天皇(清和天皇の第一皇子。在位八七六〜八八四年)

③光孝天皇(仁明天皇の第三皇子、時康親王。学問を修め、

八八四年に奇行のみられた陽成天皇が廃されたのち、即位され

た。在位八八四〜八八七年)

④宇多天皇(光孝天皇の第七皇子。在位八八七〜八九七年)

と続く諸天皇のうち、……《どの天皇が小町に和歌を歌わ

せたいと切望された》と考えられようか。

光孝天皇が和歌興隆の端緒を開いたのだ。(『新古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、六〇七頁〈光孝天皇〉参照)

- ・ 詳らかでないとはいえず、『光孝天皇』こそ、小町の和歌に興味を持っておられたように拝察される。
- ・ 九世紀後半のこの時代は、平安朝初期の漢詩文隆盛の時代を経て、我が国独自の和歌を望む気運が一挙に高まっていた時期に当る。(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、七〇八頁参照)

先にも述べたように、『古今集』巻四一四八には、こ

う記されている。

仁和帝(光孝天皇)、親王におはしませる時、布留の

滝御覽ぜむとおはしませる道に、遍照が母の家に宿り給へりける時に、庭を秋の野につくりて、御物語(昔

の思ひ出話)のついでによみて奉りける。

僧正遍照

里はあれて人はふりにし宿なれや

庭もまがきも秋の野らなる

時康親王が和歌に関心を持っておられることを知っていたからこそ、遍照は母の家の庭を秋の風情が漂うように作り、そして和歌を詠んでおもてなしたのであるう、と思

われる。(『第九十五章〈時康親王(後の光孝天皇)と、良岑宗貞(後の僧正遍照)との深い絆〉の項において既述)

『小倉百人一首』および『古今集』巻一一二には、

光孝天皇が親王であった時、ある人に若菜を摘んで差しあげられた際の情景をお詠みになった御歌がある。

君がため春の野にいでて若菜つむ

わが衣手に雪は降りつつ

なお、「君」が誰のことを指しているのかは分からない。

ある女性のことであるうともいい、父帝のことであろうとする説もある。(『小倉百人一首解説』田中重太郎、初音書房、一五頁参照)

『古今集』巻七三三七には、こう記されている。

仁和(光孝天皇)の御時、僧正遍照に七十(古希)の賀

たまひける時の御歌

かくしつとにもかくにもながらて

君が八千代にあふよしもがな

仁和元年(八八五)十二月十八日、光孝天皇は、僧正遍照に七十の賀をなされた時、

「今夜はかようなめでたい宴を張ってともに楽しんでい

が、私はどうかして今後も生きながらえ、そなたの限りな

い八千代の長寿にもめぐりあいたいものだ」とお歌いにな

った。(『三代実録』仁和元年十二月十八日条参照)

天長八年(八三一)生まれの光孝天皇は、この時五十五

885 55才
831 1才
54 5才

遍照

816 69
890 70才
885 70才
816 69

890 75才
816 74才

歳であった。君臣和楽の気分のにじみ出ている歌である。

〔古今和歌集〕日本古典文学全集、小学館、一六九頁参照)

このような『和歌』や『詞書』のはしはしから、

「光孝天皇は、和歌に多大の関心を持っておられた」

ということが分かる。

遍昭をはじめとする多くの者達から、

「小野小町が、和歌を非常にたくみに作る」

という噂をお聞きになった光孝天皇は、是非にも小町に

『雨乞の和歌』を詠ませたいとお考えになり、――名指し

て、小町に宣旨をお降しになったのであろう、と想察され

る。

光孝天皇と藤原氏との微妙な関係

それにしても仁明天皇の第三皇子時康親王(光孝天皇)

は、いったいどうしたわけで、天皇の位につかれたのだから

うか。

この当時の状況を、ごくかいつまんで述べておくことに

しよう。

藤原氏は、良房の代までは皇室と結びつく為に多々力を

尽くしてきたが、養子の基経の代になると、いままでほど

皇室の親類であることに執着する様子はみられなくなって

5,493 P

いた。

元慶七年(八八三)十一月、宮中で陽成天皇の乳母の子

が、いきなりなぐり殺されるという事件が起こった。『三

代実録』には、宮中のことだから、だれが手を下したかわ

からないと書いてあるけれども、その下手人が天皇だった

ので遠慮したのであろう。

翌年の元慶八年(八八四)二月、陽成天皇は、病気のた

め天皇をやめたいという詔を出された。基経が、その

奏の仕向けたようである。

それでは、次の天皇はだれか。

基経に招集された公卿達がこの問題について論議したと

き、宮中はわき返った。

だがここに、基経が選んだのは、仁明天皇の第三皇子で

五十四歳になる時康親王だった。

天皇の位についた時康親王(光孝天皇)は、基経のはた

らきにむくいるためか、自分の皇子たちに源姓を与えて、

みな臣籍にお降しになった。こうすれば、基経の孫の皇子

を皇太子にたてることが出来るからである。〔日本の歴史〕

(3)平安貴族、読売新聞社、七四―五頁参照)

ところが三年後の仁和三年(八八七)八月二十六日、光

孝天皇は、自分の第七男である源定省、年二十一を立

884
831
54
53

587年
571年
880年
887年
831年

てて皇太子とし、…是の日、仁寿殿に於てお隠れになつた。

なお、『三代実録』の光孝天皇即位前紀に「天長八年(八三二)生」とあるのに、同じ『三代実録』の仁和三(八八七)八月二十六日条には「天皇崩^{ひた}於仁壽殿^に。于^に時春秋五十八」とあって、一年のくいちがひがある。

この物語では、
光孝天皇は、天長八年(八三二)に生まれ、仁和三(八八七)五十七歳の時に第七男源定省(後の宇多天皇)を皇太子とし、是^にの日に退位され、…その翌年五十八歳の時に崩御されたのであろう。

と考えたい。(後述)

参考迄に述べると、天皇の位につくことを辞退しようとする時康親王に、仁明天皇の第五皇子『本康親王』(深草少将として既述)が即位を勧めたとい、こう記されている。

「本康親王は、仁明天皇の第五皇子。生年未詳。天長七年(八三〇)同九年(八三二)頃生まれか。延喜元年(九〇一)十二月十四日没。七十歳以上。元慶八年(八八四)陽成天皇の退位に際し、固辞する異母兄時康親王(光孝天皇)

152

5494P

光孝天皇の淡い想い

に即位を奏請した。寛平元年(八八九)一品。本康親王の七十の賀に際し、紀貫之・素性らによって屏風歌が献上された。高橋文室麻呂より琴を習ひ、薫香に巧みであった。菅原道真と親しく、『菅家後集』にその死を悼む詩を残すという。(『国書人名辞典』岩波書店〈本康親王〉参照)

なお、仁明天皇の第四皇子『人康親王』は、天長八年(八三二)に出生されたようである。(第九十五章〈四のみこの項において既述)

従って、第五皇子『本康親王』は、天長八年(八三二)同九年(八三二)頃誕生されたと思われる。

■光孝天皇(時康親王)は、仁明天皇の第三皇子として、天長八年(八三二)にお生まれになった。母は女御(贈皇太后)藤原朝臣澤子である。(『続日本後紀』仁明天皇の承和六年六月三十日条。『三代実録』光孝天皇即位前紀参照)

『三代実録』光孝天皇即位前紀には、光孝天皇の「為人」について、こう記されている。

「天皇少^{わか}而^{シテ}聡明^{シク}。好^{シテ}讀^ム史^ヲ。容止^シ(ふるまい)閑雅^シ(みやびやか)。謙恭和潤^シ。慈仁^シ(なごけぶかい)寛曠^シ。親^シ愛^ス九族^ヲ。性多^ク風流^シ」

同年末の
可能性が
ある。
梁母弟だから

884 生
816 生
68

とある。

69
-44
25
年差: 25
か540885-27

884 44
-841 1
43 43

53

■元慶八年(八八四)二月二十三日に大極殿で即位された光孝天皇は五十四歳。時に、小町は四十四歳だったように思われる。遍昭は六十九歳であった。

■同年九月九日の重陽の節に、光孝天皇は紫宸殿に御して、群臣に宴を賜わった。また特に文人を喚して、詩賦を作らせた。

■その翌日の九月十日、權僧正遍昭が奏言して、「雲林院は、常康親王(仁明帝の第七皇子)の旧居でした。

■十月一日、光孝天皇は紫宸殿に御して、侍臣に宴をお賜わりになった。音楽が奏され、琴が弾かれ、歌がうたわれた。…晩になって禄が賜与された。出来、不出来によつて差が有った。

■十月八日にも、宴がもうけられた。

■そして、光孝天皇踐祚之年、元慶八年(八八四)の十一月二十二日には、大嘗祭が大々的にとりおこなわれた。

翌二十三日の夜、光孝天皇は豊楽殿後房にお留まりになり、琴歌神宴の歓楽が夜を徹して催された。

更に二十四日の夜にも、昨夜同様の儀が繰り返された。二十五日には、田舞・久米舞・吉志舞・倭舞があり、夜

になつてから宮人達の五節舞が舞われた。(三代実録)舞姫たちが、優雅に軽やかに、美しい舞いを舞い続けていた。

云々」
と言った。

あるいはこの時、…光孝天皇と遍昭との間に、昨日の『文人達の招喚』のことが話題にのぼったのかも知れない。

文人達が作った詩賦をあれこれ批評していたそんな折、遍昭は、大いに慨嘆し、

「それにしても残念なことがあります。それは、小野小町を召して和歌等を作らせに成らない事です」

と述べ、—小町とのかつての贈答歌のことなどを、

「まかに話ったように想像される。(第44回)省正遍昭に侍る絶世の美女に向かって口ずさみになられた。これ以後、光孝天皇は、種々の行事の度毎に、小町の様へまあ、…その歌を聞いた小町は、帝が手にしておいで(盃)の子をそれとなく興味をもつてご覧になったのではあるまい

5,495P

・カラーで印刷して
下さい。

・右頁の上半分に
配置したい。

大きくはみ出(

田5474^p
若山通昭



第544図 僧正遍昭 (佐竹本三十六歌仙繪)

『日本繪卷物全集』三十六歌仙繪、角川書店、昭和42年12月30日発行、25頁参照、
154

に酌する白い嫺やかな手を宙に留めたまま、しばし忘我の境地をさまよっていた。
だがやがて小町は、にっこりと微笑んで会釈し、こう歌った。

天つかぜ雲ふきはらへ
久堅の月のかくるる道まどはなむ

もしかしたら、こうしたとき——光孝天皇の小町への恋心が芽生えたのではなからうか。

小町、『雨之の和歌』をよむ

年が改まって、仁和元年（八八五）の春を迎えた。

光孝天皇は、正月一日に大極殿に御して、朝賀をお受けになった。

また光孝天皇は、七日に紫宸殿に御して、青馬をご覧になり、宴を群臣に賜わりになった。……しかし、十一日には紫宸殿に出御されなかった。（三代実録）

光孝天皇の小町への思いはついついくばかりだったのであらう。

尚、これ以後、「天皇不御」等の記事が目立つようになるほど、幼少の頃から読書が好きな方であって、頑強

5,497 P

でなかった一面もあったらうが、……この物語では、小町に起因する「天皇不御」の記事も多々あるのだからと解したい。

■正月十六日条に、「従五位上行散位頭小野朝臣國梁爲上総介」

とある。（以下、「三代実録」参照）
この記事が、光孝朝に多数散見される『小野朝臣』任官記録の最初のものである。

あるいはこの記事は、この頃すでに、光孝天皇の小町への思い入れが深くなってきたことを示すものなのかも知れない。

■正月二十一日条に、「文人預席者五人賦詩」

とある。
二月十三日に、權僧止遍昭が上表してこう言ったという。「……小僧初剃髮之日。心誓自謂。鏗跡俗間。終命山窟。云々」

そしてこれより、遍昭についての記事が続出するが、以降、省くことにしたい。

■四月二十七日条に、「従五位下小野朝臣千邦爲玄蕃頭」

216 5行

とある。この年（仁和元年）の小野朝臣の任官記事は、以上二件にとどまる。

まだ、光孝天皇と小町との恋は、燃え上がるほどにまで
は至っていないかったのであろう。

■五月一日から、半月間ほど、長雨が続いた。
そこで、大和国吉野の山奥の丹生川上神社へ、大中臣朝臣夏名らを遣わし、止雨を祈願することになった。

尚、丹生川上神社（宮幣大社）の由緒にこういう。
「祭神は、高麗神（上社）、罔象女神（中社）、閻魔神（下社）の三神で、共に水に因縁深い神である。

往昔此神教して、『人声の聞えぬ深山吉野丹生川上に我宮柱を建て齋き奉らば、甘雨を降らして、霖雨を止めむ』とのたまひければ、此處に社殿を営みて祀りしを創めとす。時に天武天皇白鳳四年なりと云ふ。一（中略）一爾来、雨乞には黒馬を献じ、止雨には白馬を献ずる例となりたり」（日本社寺大観「名著刊行会〈丹生川上神社〉参照）

大宮人達は、長雨が止むように祈願する為、白馬を引きつれ、吉野の丹生川上神社へと向かった。

それでは、雨乞・止雨の祭りは、丹生川上神社の三つの

①「上社」……吉野川上流の吉野郡川上村

5,498P

156

②「中社」……吉野川支流御手濯川（高見川）の畔に位置する吉野郡小川村

③「下社」……吉野川支流である丹生川を溯ったところ、

吉野郡丹生村

のうち、どの社で行なわれたのだろうか。

丹生川上神社の由緒に、前述のとおり、

「人声の聞えぬ深山吉野丹生川上に我宮柱を建て齋き奉らば、甘雨を降らして、霖雨を止めむ」

と記されているのだから、

〈雨乞・止雨の祈願祭は、吉野川支流の丹生川を溯った所にある『丹生川上神社下社』の境内において、~~敵か~~にとり

行なわれた〉

ということがわかる。

念のために確認したところ、

●往古においては、丹生川上神社の「下社」で雨乞・止雨の祭りを行なっていた。

●「上社」および「中社」（もと仏教寺院）は、後代に建てられた、

という。（平成十四年二月十八日、丹生川上神社下社の神職者

談

この折の『止雨の祭』について、……『三代実録』仁和

の畔に位置

（高見川）

吉野川支流御手濯川

……

中社

……

下社

……

丹生川を溯った所

にある

『丹生川上神社下社』の境内において、

敵かにとり

行なわれた

ということがわかる。

念のために確認したところ、

●往古においては、丹生川上神社の「下社」で雨乞・止雨の祭りを行なっていた。

●「上社」および「中社」（もと仏教寺院）は、後代に建てられた、

という。（平成十四年二月十八日、丹生川上神社下社の神職者

談

この折の『止雨の祭』について、……『三代実録』仁和

216

下末5行
おごりかた

厳粛

前頁 154 行

元年（八八五）五月十四日条に、こう記載されている。

「（五月）十四日。霖雨未止。奉斗幣丹生河上神。祈

止雨也。告文曰。天皇詔旨。丹生河上坐雨師

大神廣前（御前）申賜。方今百姓耕種時。而

自今月一日。霖雨不止。農業流損。皇大神厚助依。

此災可止。祭所念行。故是以前。蔭子（父祖がたてた手

柄のおかげで官を得た人）正六位上、大中臣朝臣夏名乎差

使。礼代（礼物）大幣帛。白毛御馬。牽副。奉出。

此状神那可良。聞食。降雨忽霽。風災（災）不起。五穀

無損。天下饒（ゆたか）。天皇朝廷。寶位無動。常磐

堅磐。夜守日守。仁利。護幸奉賜。止。恐。恐。申賜。止。久。申

たぶん、大中臣朝臣夏名は、慣例通りの手順に従って止

雨を祈願したのだから。

この時、小町は、

「夏名が『止雨』を祈願したからだろうか、霖雨はびたり

と止んだ。

しかし、こんどは日照りが続いた。

霖雨も困るが、干魃はもつと恐ろしい。

5,499^p

大地は乾ききってしまい、最悪の事態さえ予感されるの

だった。

そんな時、小町のもとへ、

「雨乞の和歌よむべし」

という宣旨が降った。

おそろく光孝天皇が、

《小町に、雨乞の和歌を詠ませたい》

とお考えになつたのであろう。

歌人小野小町にとって、これ以上に名譽なことはない。

小町は、朝廷から差し向けられた華麗極まりない牛車に

揺られながら、大和国を南下してゆき、吉野の山奥の丹生

川上神社に着いたと想到される。

もつとも、『三代実録』仁和元年（八八五）七月十三日

条には、ごく単にこう記されている。

「秋七月十三日。遣使。大和国丹生川上雨師神。奉斗幣

黒馬。祈雨也。」

丹生川上神社に設けられた祭壇の前で、小野小町はおご

そかに神に祈りをささげ、そして歌を詠んだ。

千早振る神も見まさば立騒ぎ

天の戸川の樋口あけ給へ

千早振る神よ。じつとしていないで、立ち騒いで神鳴り

大ワツ7108⁸下
使セミム

(雷)を起こし、『天の安川』の樋の口を開いて、直ちに雨を降らせ給へ)

小町の声は、天上の国の神々の耳にも聞えて、……たちまち待望の雨が降ったのだろう。

この年、飢饉は無かったように『三代実録』から推察される。

この当時、雨乞といふ事は、甚だ重大な儀式であった。雨乞には、名僧知識を集め、有らん限りの御祈禱をしたものであり、今の世からは殆ど想像も及ばないほど大切な『天皇の国務』だった。

この大切な重い国務が、一人の女性、小野小町に命ぜられたのは、実に異数(つねならぬためし、めったにないこと)であった。全く前後に例の無い破格の事柄と云ふも差支へ

は無い。(『小野小町論』黒岩涙香、朝報社、一六〇八頁参照)

しかも小町は、その重大な国務を天皇に代わって遂行し、天の神々の耳目を集め、雨を降らせに違いない。

光孝天皇は、小町の歌が優れていることをお褒めになり、雨が降って大地が潤ったことを大いにお喜びになった、

と拝察される。

八月六日。明経博士等が参内したが、光孝天皇は引見せ

5,000

ず、禄を賜い、お帰しになった。

■八月十五日。神泉苑に行幸された。文人達が喚されて、詩賦を作った。その席に預かった者は三十三人であった。

察するところ、当代きっての文人達が、神泉苑で詩想を練ったのであろう。

推敲をつづけるそんな文人たちのなかに、小野小町の姿もあつたことだろうか。

①因みに述べると、『玉造小町子壮衰書』に、こう記されている。

花の時を待ちては玉筆をとりて紅桜紫藤の和歌を詠じ、月の夜を迎へては金絃を操って鶴琴竜笛の妙曲を調ぶ。

口に鳳凰の管を吹けば梁塵廻りて声斜なり。

手に鸚鵡の觴を取れば漢月(天の川と明月)落ちて影静かなり。

且は楽天(白乐天、白居易のこと)秦中吟の詩を学び、且は幸地噂上詠の賦に效ふ。

韻を古調に造りて、詩を新章に賦せんと云ふこと爾なり。

とある。(第九十五章〈光孝天皇の寵愛〉の項において詳述し

現在、よく知られていないといえ、——小野小町は、和歌だけでなく詩賦をも巧みに作ったのだから。
 ② ~~その~~ ~~歌~~ ~~だけ~~ ~~に~~ ~~は~~ 次のように謡われてい

「これは出羽の郡司。小野の良實が女。小野の小町がなれる果にてさむらふなり。傷はしやな小町は。さも古は優女にて。花の貌輝き。桂の黛青うして。白粉を絶やさず。羅綾(うすぎぬとあやおり)の衣多うして。桂殿(立派な御殿)の間に餘りしぞかし。歌を詠み詩を作り。酔を飲むる觴は。漢月袖に静かなり。云々」

小野小町は、この歌だ

もしかしたら、

「小町が作った詩が、何らかの詩集に、ひそやかにそと掲載されているのではなからうか」

とも思われるが、……しかし今、それを指摘することは出来ない。
 ③ また、『古今和歌集』真名序の冒頭に、こう記されている。

「和歌に六義あり。一に曰く、風(政治などを遠まわしに風刺した詩)。二に曰く、賦(比喩などを用いない直叙の詩)。

三に曰く、云々」

5,501P

などである。(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、四

二三頁参照)

ともあれ、

「八月十五日の十五夜に、小野小町も招かれて、詩賦や和歌(賦)を作ったのだから」

と観察される。

木のまより、もりくる月の影みれば、
 心盡しの秋はきにけり

(群書類従本「小町集」。「古今集」巻第四一(八四)十五夜の月の光が木のまよりもれていて、そんな中を帝がおいでになった。帝の影が、だんだん近づいてくる。心盡しの(さまざまに物思いをする)秋がやってきたから、

こんなにも物思いするのでしょうか。

小町は、かつて考えてみたことさえ、ない仕合わせを感じ

じる一方、
 帝をお慕いしていいのだからか」と
 躊躇し、あれこれ様様な物思いにふけり、気がもめてしか

たがなかったのであらう。

なお、「月影」は、月のひかり、月の姿、月の光に映し

出されたものの姿、等の種々の意味で用いられるという。

(『広辞苑』「月影」参照)

日が暮れて、どれくらい後のことだったろうか、……

文人らは、鸞輿(天子の輿)が還って行くのをお見送りした。
 『三代実録』仁和元年八月十五日条の末尾に、
 「日暮 鸞輿還し宮」

とある。
 ■九月九日の重陽の節の折にも、文人達は招喚されて詩賦
 を作った。

■十月一日には宴がもうけられ、和歌が作られた。
 ■十月二十二日に、遍昭は『僧正』となった。

■十二月十八日、光孝天皇は、今年七十歳(古希)になっ
 た僧正遍昭を慶賀された。(三代実録) 58頁
F 144

衣通姫の流なり

この当時の人々は、小野小町をどう見ていたのだろうか

か。
 平安朝初期の六人の和歌の名人、即ち『六歌仙』は、
 僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・
 大友黒主(大友皇子の曾孫。大友与多王の孫)
 のことである。(『古今集』仮名序・真名序。「広辞苑」六歌
 仙)等参照)

六歌仙の中のただ一人の女性として『小野小町』を選ん
 だ紀貫之は、『古今集』仮名序において、

5,502 P

小野小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、
 つよからず、いはば、よき女のなやめるところあるに似
 たり。つよからぬは女の歌なればなるべし。
 と評した。

また、紀淑望が書いたといわれる漢文の『古今集』真名
 序には、

小野小町之歌。古衣通姫之流也。然艶而無「氣力」。如
 病婦之着「花粉」。

「小野小町の歌は、古の衣通姫の流なれども、然も、艶に
 して氣力なし。病婦の花粉を着けたるがごとし」

とある。(『古今和歌集』日本古典文学全集、小学館、一四、
 五九、四一七頁。「小野小町歌」小林茂美、桜楓社、三二頁
 参照)

＊
 それでは、『衣通姫』とは、一体、どのような女性を指
 しているのでしょうか。

『衣通姫』にまつわる伝承は、日本書紀と古事記の両方に
 あり、かつ異同(違い)もあって、——『衣通姫』と呼ば
 れた女性が、幾人かいたことがうかがえる。(『小野小町歌』
 小林茂美、桜楓社、三三九頁参照)
 ■『日本書紀』では、允恭天皇の皇后忍坂大中姫(稚野毛

一派皇子の娘で、木梨輕皇子・安康天皇・輕大娘皇女・雄略天皇らの母。第1表参照)の言葉として、

「妾が弟(妹)、名は弟姫とまうしたまふ。弟姫、容姿絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて晃れり。是を以て、時人、號けて、衣通郎姫と曰す」

と述べている。(允恭紀七年十一月一日条)

つまり、允恭天皇の皇后の妹「弟姫」が、『衣通郎姫』

と呼ばれた、という。

■一方、『古事記』では、允恭天皇とその皇后忍坂大中津

比売との間に生まれた皇女輕大郎女について、

「亦の名は、衣通郎女」

と述べ、その名の由来を、

「御名を衣通の王と負せるゆゑ(お呼びする理由)は、其の身の光、衣より通り出づればぞ」

と注記している。

つまり、允恭天皇と皇后との娘「輕大郎女」が、『衣通郎女』と呼ばれた、という。

*

といったことから推しはかると、我が国の古代にお

いては、容姿絶妙な艶しい女性を讚称して、『衣通郎姫』

とか『衣通郎女』という亦の名で呼んでいたように思われ

5,503 P

る。

それはさながら、…現代の我々が、美しい女性のことを親しみを込めて、『小野小町』と呼ぶのと全く同じような感覚であったかも知れない。

すなわち、小野小町以後、美しい人が『小野小町』の愛称で呼ばれることが多いのと同様に、小野小町の時代迄は、透き通るように美しい人は、『衣通郎姫』・『衣通郎女』といった愛称で呼ばれ、絶讃されていたのであろう。

恐らく、母『衣通郎姫』の血を受けた小町は、艶しい色が衣より晃り徹るばかりの美人だったに違いない。

そこで歌人である紀貫之は、美しい衣通郎女をもつ小町が、そんなにまでも美しいことを言い表わすため、**短詩**

「小野小町は、古の衣通郎(美人)の流(末裔)なり」

「小野小町は、美人系の血筋をひいている」

と評したように思われる。

たしかに、『古今集』に「古の衣通郎の流なり」と記されてはいるが、しかし、だからといって、特に允恭天皇の皇后の妹、あるいは允恭天皇の娘との関連性を考える必要はあるまい。

尚、これから述べるように、光孝天皇と小野小町との間

に親密きわまりない関係があったからこそ、……皇室に遠慮することなく、勅撰和歌集である『古今集』において、

いわば公然と、

「小野小町は、古の衣通姫の流なり」

と評し得たようにも思われる。

竹取物語

全く定かならないことながらゆえに

あるいはもしかしたら小野小町は、丁度このころ、

『竹取物語』を書き綴ったのかも知れない

漢籍や仏典にかなりの教養を持ち、和歌の才能をも有した人物が、『竹取物語』の作者として推察される、という。

〔竹取物語・伊勢物語・大和物語〕日本古典文学大系、岩波書店、六頁参照

竹取物語は、平安初期に成立した日本最古の物語である。

推定説には、弘仁三年（八一）以後、延喜元年（九〇一）

以前とするものがあり、それ以降とする説もあって多種多

様である。

作者未詳。昔から源順（九二二〜九八三）説が唱えら

れ、他に源融（八二二〜八九五）説や遍昭（八一六〜八九〇）説などがある。〔世界大百科事典〕平凡社〈竹取物語〉〈源

順〉他参照

竹取物語の内容については、広くよく知られている。

「竹取の翁が竹の中から得て育てた美女かぐや姫は、五人の貴公子の熱心な求婚を難題を出してしりぞけ、時の帝の招聘にも応ぜず、遂に八月十五夜、月の世界に帰る」

という筋書きである。〔広辞苑〕〈竹取物語〉参照

多々差違はあるものの、……どことなく、小野小町の境涯と似た物語であるように感じられる。

〔天上の国に比して考えられる大倭国（肥後国）で生まれ、猶子（養子）として引き取られ、祖父篁（竹やぶの意）に

よって育てられた絶世の美女小野小町は、熱心な求婚を難題を出してしりぞけ、時の帝（光孝天皇）からの招聘にも

未だ応じかねていたのだろう〕

と想察される。

小野小町は、このようなこれまでの自分自身の半生を基にして、情緒豊かな『竹取物語』を書き上げたのではなからうか。

なお、『竹取物語』は、古くは『竹取の翁の物語』・『かぐや姫の物語』ともよばれたという。〔世界大百科事典〕

平凡社〈竹取物語〉参照)

また、『竹取物語』は、源氏物語(絵合)に「物語の出

で来はじめの祖」と記されているように、十世紀後半以後

さかんに作られることになる物語文学の先駆的作品となっ

たのだった。(史料による日本の歩み「古代編、吉川弘文館

三三五頁。「竹取物語・伊勢物語・大和物語」日本古典文学大

系、岩波書店、五頁参照)

光孝天皇の寵愛

新たな年、光孝天皇の仁和二年(八八〇)の春を迎えた。

嬉しい、心ときめく春であった。

時に、光孝天皇は五十六歳、小町は四十六歳であったる

うか。

『三代実録』仁和二年正月十六日条に、

①「散位従五位下小野朝臣千里爲_ス山城介」

②「散位従五位下小野朝臣當岑爲_ス周防守」

とあり、この記事が、仁和二年から三年にかけて多数見ら

れる「小野朝臣」任官記録の端緒をなすものである。

『三代実録』仁和二年及び三年条に見られる「小野朝臣」

任官記事の回数を数えると、
・仁和二年に、七回(四名)

大抵おの(親・祖)
「物語のハビデキ
は(ハ)ハの祖ナガ
竹取の翁」
とある

・仁和三年に、五回(四名)

もあって、……それ以前と較べると、小野氏一族が際立っ

て幅広く引き立てられている、といえよう。

『三代実録』清和・陽成・光孝朝の記録中に見られる

「小野朝臣」任官記事の【掲載回数】を示す一覧表を掲げ

てみよう。

■この表で特に目を引くのは、光孝天皇の仁和二年か

ら三年にかけて、小野氏一族の任官記事が頻出するべ

いことである。

この物語では、

《仁和二年の春頃から、翌三年八月の退位迄の間、光孝天

皇は、愛する小町の爲に、……その一族に恩恵を及ぼされ

た》

と考えてみたい。(第九十五章〈光孝天皇の淡い想い〉の項、

光孝天皇の「為人」〔慈仁寛曠。親_ニ愛_ス九族〕参照)

とはいえこの当時は、藤原氏に遠慮せざるを得ない、思

うにまかせない時代であった。

だから、小野朝臣を重要な官職にいきな

りあげたいかあったであろう。

しかしそれでも、光孝天皇は、小野氏一族の多くを引き

立ててやらすにはおれない気持ちでおいでだったのだらう、

15055

竹取物語 赤巻 3月ばかりで...

「わ」おつ一万
あと一巻

5,506 P

字アキ

竹取物語(巻) 19P 32+60P
70+56P

赤巻
竹取物語
29頁

竹取の翁の年齢

竹取の翁の年齢について

(1) 冒頭近く「公翁、年七十に餘りぬ。今日

(2) 末尾近く「公翁、今年は五十ばかりなり

不一致(矛盾)不備が見られる、という。

12.5
6M

竹取物語・伊勢物語・大和物語
典文学大系、岩波書店、昭和三十二年十一月

二十五日(第二刷)発行、一九頁参照

なるほど、片一方の叙述を忘れて「...」
つかり、もう一方の記述を行なったような印

象を受ける。

だが、はたしてそうなのだろうか。

かぐや姫を竹の中から見出した当時、竹取の

公翁は七十余歳だった。け水ども、ある年

の望月間近かかぐや姫を養ひたてまつること

赤巻竹取物語 4頁1行

626
あさひ

赤色の収物語 64頁一行

135 24 コチ

小野小町 130頁下

小野小町 222 下未2行

5,507 P

二十餘年後の当時、かぐや姫のおかげで九十歳になるのでなく、何と年齢が若返り、不思議にも五十歳ばかりになつて来た。と述べた。

② また下「五十ばかり」と述べたその文意の奥に、祖父算は、五十一歳で死した。という背景があつたのだろう。

はつまり「ないもの」小野小町は、

へ祖父が、五十ばかりで逝去した。という（こと）を、竹取の翁の物語の中、そのととたためておきたのではなからうか。

（第九章「算の病」の項）（算五十一歳）（参照）

③ だいいち、世間一般には、五十歳ばかりの壮年男性を「お翁」と言ひ、男の老人（と言ひ）といふ。

小町 130 P

165 思ひ小

といふこと

・予知らぬ風を装い、さらりと、
 「公羽、今年は五十ばかりなりけりども」
 と書いたのたろう。

つまり、小野小町は、
 へ冒頭あたりの「公羽、年七十に餘りぬ」と
 末尾近傍の「公羽下今年は五十ばかりなり」と
 りう口ちぐはぐを、当然認識していたにも
 かかわらず、物語の趣向として、ちよ
 と見たところ、単純な書き誤りとも思え
 ることを述べたのであろう。

と想像される。
 ・「年月が経つほど年が若くなり、七十餘歳た
 った翁が、「フー」か、五十歳ばかりの公羽にな
 っていた。
 という筋書きは、「御伽噺」（非現実的な夢）
 のような話として、面白く、興味深い。

*

5509^P

おがえ
た 変若 返る

万③ 295 未了行目
君(来ま)は 返る

因みに述べると「万巻十二一三〇四三に
 次の歌が掲載されていりる。
 露霜の消やすきわが身 老いぬとも
 また若反り 君を待たむ
 (作者不明) 我が身は年老い
 ようとも 又 若返ってあなたと恋交した
 とい
 とある。

万葉集には「世の中は無常だ」とか「人
 間の命ははかない」とか「恋が苦しくて死に
 そうだ」とかいう言葉が氾濫していりる。
 ところが、この一首は「逆である」
 人間の体は滅びやすいつら大前提をしつ
 かり受ける入小ながら、その上でどうするか
 それならまた若返水はいいと断言する。
 そしてもう一度、同じ人に恋したという
 遅いさ。

ここに大事なのは、「消やすい」ものを「体

だといつているところである。命いのちとは言いつて

いのち

命いのちとは

減へんひ

やす

肉にく体たいに

輝かがやき

をを与あたえる

別べつの

存在そんざいだ

と古代こくたいの人は考はかえていたようである。

つねに肉にく体たいを励はげますものは消きえやすくな

るのである

という。(朝日新聞)平成二十五年十一月

三十日付(ハナカニシ先生の万葉塾)万葉

集(三)日本古典文学大系、岩波書店、昭和四

十二年十月三十日第八刷発行(二九五頁参

照)

5.511 P

心化し 心掛り

都落ち

口取の翁の物語を書き終えるや小町は

く旅仕度に取り掛かった。

せっかくのお志しへ御厚意口情愛で

ございますか。私に到底お受け致

しかねます。云々。私に到底お受け致

といたためた文を使人に託し、口帝(光孝天

皇)の御許へ上らせた小野小町は、

そかに都を離れ、淀川を下り、難波へ至

た。

難波江(大阪市付近の海面の古称)の岸

に佇む女が、遠くへ漕ぎ渡って行く釣舟を

つと見詰め続けていた。

小舟の上で、時折り手を振る海人の姿が、

次第に小さくなってゆく。

女の面には、涙があつた。

小町は、その悲しみを我が事のように感じ

難波江の釣する海人にわかれむ

人もわかごと袖や濡るらん

と歌った。

*「難波江」のは、第四句の「人」にかかっているのだろうか。

第一句の

現在の事態を表す
どうしてか等の疑問を込めて出ている

5,5/2 P

小野小町
前田善子
3/7P

同歌
247 末の厚紙用紙

□ ここのところ、
群書類従 卷 第三十七二

□ 小町集 64 番歌 には、

難波 ^{なは} 波 ^は ぬの 釣 ^つ する人 ^{ひと} ため ^{ため} ぬか ^{ぬか} けむ

人 ^{ひと} も ^も わ ^わ か ^か こ ^こ と ^と 袖 ^{そで} や ^や ぬ ^ぬ ら ^ら ん

と ^と あ ^あ っ ^っ て ^て、 [、] じ ^じ ー ^ー どう ^{どう} い ^い う ^う 意 ^い 味 ^み な ^な の ^の だ ^だ か ^か、 [、] さ ^さ っ

ぱ ^ぱ り ^り か ^か ら ^ら な ^な い ^い。

□ 因 ^よ ^よ み ^み に ^に 述 ^つ べ ^べ る ^る と ^と、

(1) [仙] [板] [三] な ^な に ^に は ^は め ^め の ^の [二] 釣 ^つ する ^{する} 人 ^{ひと} に [三] ぬ ^ぬ か ^か け

ん

(2) [架] I [二] な ^な に ^に は ^は 江 ^え に [三] つ ^つ り ^り す ^す る ^る あ ^あ ま ^ま に [三] ぬ ^ぬ か ^か

れ ^れ け ^け ん

(3) [異] [二] な ^な に ^に は ^は め ^め に [三] つ ^つ り ^り す ^す る ^る 人 ^{ひと} の [三] ぬ ^ぬ か ^か け

けん [五] 袖 ^{そで} や ^や ぬ ^ぬ け ^け ん

(4) [補] [一] 難 ^{なん} 波 ^は 江 ^え の [二] つ ^つ り ^り す ^す る ^る 海 ^{うみ} 士 ^し に [三] ぬ ^ぬ か ^か け

せ ^せ ぬ

(5) [静] [三] ぬ ^ぬ か ^か け ^け せん

と ^と あ ^あ る ^る。

＊ [＊] な ^な か ^か、

[仙] 歌 ^{うた} 仙 ^{せん} 本 ^{ほん}。
[架] I 架 ^か 藏 ^{ざう} 小 ^{せう} 野 ^の 小 ^{せう} 町 ^{てい} 集 ^{しゅう}。
[異] 異 ^い 々 ^々

5,514 P

いとま
お別れ

里』へ舞い戻ろうと思うのだった。

*

一方、宮中では、帝が、天を仰いで長嘆息
しておいでになつた。

天上の国へ帰らねばなりませんので、
お暇（お別れ）申し上げますと。

そんなことをさせてなるものか
竹取の翁の物語を讀んだ帝は、
層々小町に心を引かれておいでの御様子
だった。

小町を曰大後国（九州）へ帰らせ
ました。朕の面目は丸つぶれだ

大后
朕

捨てられてしまったのね 捨てるのはあなたのため 捨てるのはあなたのため
 5,515P
 Rは第一巻13頁に
 流石に捨てる仕舞
 大なる尊敬の意を表す

帝といえども やはり 世の男共と同じ
 であつたか
 へお可哀相に下捨てら小なさつたのね
 へそ小にても口小野小所Bという女人
 流石に あつたか
 嬉嬉として語り合う巻の噂話か所聞えて
 ぎさうである。

破線にするの...
 *
 世間

5,577P

・カラー
左頁の上半分にはみ出して、
大きく掲載
下さい。



ゴ4
14QG
中心のりわけ

ゴ4
13QG

第545図

←均等→
あかし すま なたは
明石 須磨 難波 あたりの地図

『新詳高等社会科地図』 帝国書院 平成3年3月25日発行 100頁参照
あかし うぶ すま うぶ はくせいせいほう ふうこうめいひ
・明石の浦も 須磨の浦も 白砂青松の風光明媚を以て知られた。(「広辞苑」<明石><須磨>参照)

12QG ゴ4



・白黒。(元紙)
・左頁の下半分を大きく掲載して下さい。

地図
淡路島が分かるように
しておいて下さい。

14QGゴ4 中心3.7km

半字アキ 写真図版 802 約2kmにわたって続く白砂青松の須磨の浦

13QGゴ4

ふるさとの文化遺産 郷土資料事典『兵庫県』人文社、1997年10月1日発行、4頁参照

改行

が下整然と一隊行列を組んで並らび、全体が一団となつて小町の方を指し、肅肅とやつて来る。

見えた。その左右および後方々々無数の船が、東に広がる。海の上で、お待ち願ひとう存

早船上の急使は、礼儀正しく、こちらへ参ら小

度でやつてきて、小町の乗る舟の道行を妨げ

募つていた。

小町の心の内の悲しさは、棋え切水ない毎と

あたりの空が、白白と明るくなつていた。

明石の門より大和島見中

本人麻呂の歌

万巻第三二五五に、よく知られ下いる柿

杵必要

5,520 P

なぎ目が、めだたなうしろにしておいて下さい。

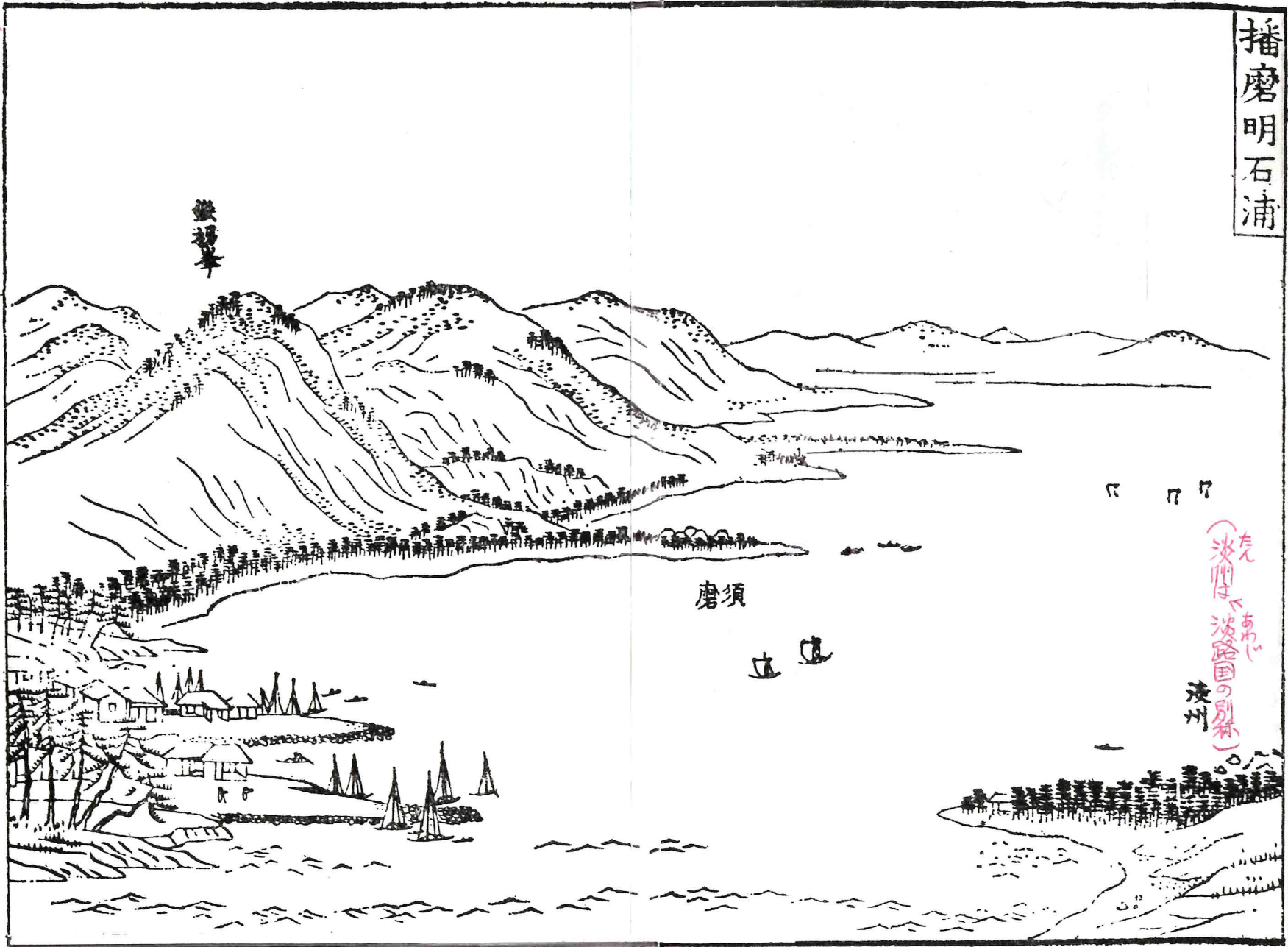
杵必要

白黒
右頁の下半分に
大きく掲載下さい!!



次頁の
有明の月

播磨明石浦



磨須

たえ
淡路はあかい
淡路国の別称
淡州

第546図 明石の浦 (山水奇観)

『明石市史』上巻 明石市役所 昭和35年3月31日発行 67頁 他参照 178P

・奥は、大和島だろうか。

